

第3章 保幼小連携・接続研究

大阪市内には、令和3年4月現在、公立幼稚園が52園、公立保育所（公設置民営保育所を含む）が87所、私立幼稚園が84園、私立保育園が380園、認定こども園が95園、地域型保育事業所が222園、国立幼稚園1園、計921園所の就学前施設（認可外保育施設を除く）があります。また、公立小学校が286校あります。

一つの小学校の周りには、公立幼稚園や公立保育所が必ずしも隣接しているとは限らず、その多くは私立幼稚園、私立保育所、認定こども園等が複数隣接しています。近くに隣接する就学前施設がない小学校もあります。また子ども同士の交流会を実施するには、距離的に行き帰りの安全面に課題等もあります。そんな中、第1期（平成30年度・令和元年度）では、3つの区の4つの小学校と近隣の公私幼保の就学前施設に協力していただき、連携・接続の在り方・進め方の実践研究を実施し、その取組を発信しました。

第2期（令和2・3年度）では、3つの区の3つの小学校と近隣の公私幼保の就学前施設で実践研究に取り組んでいただきました。この2年間は、新型コロナウイルス感染症が拡大し、その防止対策を講じた学校運営や園所運営が強られる中での研究でした。年度当初より緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発出され、どのようにして「連携・接続」の取組を進めればよいのか苦慮する状況でしたが、「何かできることがあるはず」との考えのもと、動画やオンライン等を活用しながら創意工夫した取組が進められました。

第3章では、コロナ禍の中での3つのブロックの取組を紹介します。今後の各校園所での「連携・接続」の取組の参考になる知恵と工夫がたくさんあります。

第3章－1 保幼小連携・接続研究の研究概要

(1) 研究目的

- 就学前施設（保育園所、幼稚園、認定こども園）と小学校との連携・接続の実践研究を通して、園所・校種別間の理解を深め合い、それぞれの「ねらい」を踏まえながら、連携・接続の一層の充実を図ることで、小学校教育への移行を円滑にするとともに、子どもの学びを豊かにし、幼児教育・小学校教育の質の向上を図る。
- ・就学前施設と小学校がそれぞれの役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育を組織的に行うための「連携・接続」の進め方と在り方を研究する。

(2) 指定期間

2年

(3) 研究方法

- ①小学校を核にした近隣就学前施設を一つのブロックとして研究する。

Aブロック	福島区	鷺洲小学校、貫江田幼稚園（公）、 認定こども園和光園（私）、認定こども園第二和光園（私） 〔公立小学校と <u>公立幼稚園・私立幼稚園</u> 〕
Bブロック	西区	本田小学校、靱幼稚園（公）、梅本保育所（公）、 川口聖マリア幼稚園（私） 〔公立小学校と <u>公立の幼稚園・公立保育所・私立幼稚園</u> 〕
Cブロック	平野区	加美北小学校、加美北幼稚園（公）、加美第1保育所（公）、 さくらんぼ保育園（私） 〔公立小学校と <u>公立幼稚園・公立保育所・私立保育園</u> 〕

- ②ブロックごとに大学教授を講師に招聘し、指導・助言していただく。

Aブロック	奈良教育大学	横山 真貴子	教授
Bブロック	兵庫教育大学	溝邊 和成	教授
Cブロック	大阪教育大学	戸田 有一	教授

- ③「連携・接続」に関わる取組を公開授業や公開保育、発表会等で、市内小学校や就学前施設に向けて発信し広める。

(4) 研究の進め方

- ①取組の年間計画を立てる。
- ②研究テーマと研究内容を決める。

〔研究内容例〕

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を活用した「連携・接続」の在り方
- ・就学前施設では小学校教育を見据えてどのように「学びの芽生え」を育み、小学校では就学前施設で育まれた「学びの芽生え」をどのように「自覚的な学び」につなげるのか。

- ・これから「連携・接続」をしていくとき、どのようなことから始めればよいのか、どのように積み上げていけばよいのか。
- ・小学校教員が感じている入学当初の子どもの課題（知・徳・体・生活等）や、就学前施設の教職員が抱えている小学校教育への思いを共有し、円滑な接続につなげるには、どのようにすればよいのか。
- ・「就学前教育カリキュラム」を活用した「連携・接続」の具体化。
- ・接続期のカリキュラム（スタートカリキュラム等）を就学前施設と小学校が共同でつくる。等

※就学前教育・保育と小学校教育との接続の視点から、意見交換や情報共有、相互参観等を通して、学校・園所施設種別間の理解を深めることを基盤にする。

③保幼小施設間の連絡体制（連携担当者）を構築する。

④各施設内の研究体制を構築する。

（一部の教職員・保育士だけの研究にならないよう、他の教職員等と情報共有して進める）

(5) その他

- ・大阪市特別参与（幼児教育実践研究所 久野泰可代表取締役、東大阪大学学長 吉岡真知子教授）にも、本事業について助言・指導をしていただく。
- ・全ブロックの施設長及び連携担当者をもって「保幼小連携・接続研究全体会」とする。
- ・年度当初、第1回保幼小連携・接続研究全体会を開催する。講師による講演の後、ブロックごとに研究の進め方を話し合う。
- ・研究の計画を提出する。
- ・公開授業・公開保育もしくは研究発表会を年1回実施する。
公開授業・公開保育や研究発表の後に、意見交換の場を設ける。
- ・授業・保育案の書式は問わない。（ねらい、テーマとの関連、本時に至るまでの取組、本時の流れ等が分かるもの）
- ・授業・保育案には、実施後の考察を追記しておく。
- ・2年目に、研究発表会で2年間の取組を全市に発信する。
- ・研究のまとめとして、資料等を提出する。

第3章-2 Aブロックの研究のまとめ

Aブロック

大阪市立鷺洲小学校（公立）・大阪市立貫江田幼稚園（公立）

幼保連携型認定こども園和光園（私立）・幼保連携型認定こども園第二和光園（私立）

【ブロックテーマ】 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の視点に立った
「連携・接続」の在り方や進め方

【指導助言】 奈良教育大学 横山 真貴子 教授

1 研究前のブロックの現状と課題及びテーマ設定の理由

(1) 研究前のブロックの現状と課題

Aブロックの小学校と就学前施設では、研究を始めるまでは、授業見学・給食見学・凧揚げなどの交流活動、就学前の小学校体験（わくわくスタート）や授業参観（教職員）などを通して、児童、園児、教職員間の交流を深めるようにしていた。交流活動においては、その時だけの活動にならないよう活動の連続性を考え合うことや、小学校・就学前施設がそれぞれのねらいを達成するためにも、相互理解を深めていくことが大事だと考えた。今年度の小学校は、1年生の人数が増えてきている上、新型コロナウイルス感染症拡大・予防を考えながらの取組となるので、今後の交流の仕方に工夫を要する。

(2) テーマ設定の理由

教職員間での意見交流や合同の研究の機会などをもち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を共有するなどの連携を図り、幼稚園と幼保連携型認定こども園における教育及び保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう研究に取り組むことにした。

2 主な取組

1年目の取組では、各校園所の授業や保育の記録・写真や映像を持ち寄り、授業や保育の内容、子どもの実態を共有して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕につながる姿を話し合う、教職員研修を実施した。



(1) 大阪市立鷺洲小学校

【研究テーマ】

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を明らかにするために、連携を深める。

本校では、以前より入学後の子どもたちがスムーズに学校生活を送れるように、5歳児を対象に小学校の授業・給食見学や、入学前に学校での生活を紹介する「わくわくスタート」を実施してきた。入学後は、生活科を中心にスタートカリキュラムを編成し取り組んできた。令和

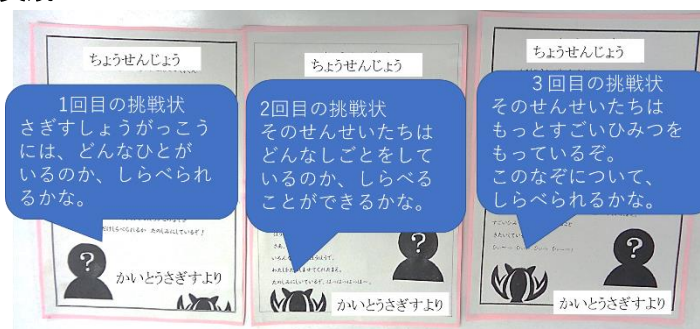
2年度から保幼小連携・接続研究の指定を受けて、これまで行ってきた取組について、新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕につながっているのかを意識して、子どもたちが就学前に培ってきた「やってみたい」「知りたい」「伝えたい」などという気持ちを基に学習活動を計画し、実践した。

【主な取組】

○1年目の取組

「がっこうをたんけんしよう」の実践

入学式を経験できなかった子どもたちに、「小学校は安全安心な場所であり、自分たちは多くの人に歓迎され、見守られ、支えられていることに気付かせたい」「学校の一員として自分たちが学校のためにできることを考



えさせたい」というねらいをもって実践した。具体的には、「かいとうさぎす」から挑戦状が届き、子どもたちは探偵団を結成して謎解きをしながら見つけたことをクラスで報告するという実践である。幼稚園の時にも謎解きに挑戦したことがある子どももあり、子どもたちは積極的に取り組んだ。また、小学校の全教職員が協力することで、本当に謎解きを行っているというワクワク感とともに、いろいろな秘密を見つけたいという意欲をもたせることができた。なぞときはそれぞれの関係者が困っていることをクイズにしたのでしょうか。学習後は、活動の中で事務職員から水道代がかかるという話を聞き、水道の水をしっかりと止める姿が見られた。また、おいしい給食を作りたいという給食調理員の願いを聞いたことで、「一生懸命に作ってくれた給食だから、苦手な物を一口でも多く食べられるようになりたい。」という声も聞かれた。図書室の本がきちんと整理されていないことがあり司書の先生や委員会の人々が整理していることを知ってからは、「自分たちがきちんと直せばその苦労はなくなるね。」という声も聞かれるようになった。

○2年目の取組

①1年生との交流活動

昨年度の状況の中でも2年生（現3年生）が自分たちにいろいろな関わりをもってきて嬉しかったという気持ちを基に、自分たちに何ができるかという視点で話し合う中で「学校は楽しいところだと教えてあげたい。」という意見にまとまった。そこで、以下のような活動を計画し、実施した。

- ・学校の中の施設や場所を案内する活動

特別教室の場所やその役割などを1年生に優しく声掛けをしながら紹介した。

- ・休み時間の交流活動

紙芝居の読み聞かせやクイズ、運動場での活動など。

- ・「おもちゃランド」を開催し交流活動を行う。

自分たちの手作りおもちゃで1年生が楽しく遊べるように、必要な係や「おもちゃランド」に必要な物を話し合った。もっと楽しくなるようにと自分が作ったおもちゃを改良する姿も見られた。

②わくわくスタートに代わるDVDの作成

コロナ禍の中でこの2年間「わくわくスタート」が実施できていないことを踏まえ、DVDを作成して学校生活の様子を紹介することにした。作成に当たっては、まず子どもたちと、入学する時に「何が楽しみだったか。」「何が不安だったか。」ということ話し合った。その中で出てきた意見としては、「広い運動場で遊ぶのが楽しみだった。」「早く国語や算数の学習をしたかった。」という意見があった一方で、「給食が食べられるか心配だった。」「一人で学校に行けるのか不安だった。」「どんな先生かな？友達ができるかな？って心配だった。」という意見も多く聞かれた。そこで、「同じ思いを新しい1年生ももっているのではないか。」と投げかけたところ、自分たちが楽しく学習したり学校生活を送ったりしている様子を新しい1年生に紹介すれば、小学校生活のことがよく分かり、不安に思っていることも解消し、安心して入学式を迎えられるのではないかということに意見がまとまった。

次に、紹介する内容について具体的に考えることにした。小学校での一日の生活の様子を紹介する場面では、どんな活動の様子を伝えればいいかを話し合うだけでなく、活動や学習を楽しくスムーズにすすめるコツも伝えればいいのではないかという意見が出た。各教科の学習内容を紹介する場面では、自分たちがこの一年間にできるようになったことを中心に、楽しく学習している様子を伝えようという意見が出た。このことから、子どもたちが一年間の学びの中で自分の成長を実感し、自信をもって学校生活を送っている様子が伺われた。動画を撮影する中で、「早く見てもらいたいね。」「きっと喜んでくれるね。」などの声が聞かれ、2年生に進級する喜びを感じていることが伝わってきた。(3月に完成し就学前施設に配付)

【成果と課題】

- 就学前教育で育ってきた力を意識して学習活動を組み立てることで、子どもたちは自ら考え試行錯誤し、知識などを習得していく。指導者は安全に活動が進むように配慮したり、方向性がずれそうなときは修正したりするとともに、子どもたちが困った時に助言できるような態勢を整えておくことが、子どもたちの自信につながるということに改めて気付いた。
- 子どもたちが他者と関わる活動をする時に、自分の経験と重ね合わせ、「自分たちはどうだったか。」「どうしたかったか。」という視点で考えられるようになり、活動が充実した。
- 課題としては、小学校のスタートカリキュラムが就学前の学びを十分に生かしたものになっているのか見直す必要がある。また、この取組を主に低学年だけの取組で終わらずに、全ての教職員に広めていくとともに、継続して実践していく必要がある。

(2) 大阪市立貫江田幼稚園

【研究テーマ】

幼児の遊びから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]のどのような姿が見られ、どのような育ちにつながっていくのかを探り、環境の工夫に取り組む。

【主な取組】

○1年目の取組

コロナ禍で、幼児と児童の交流ができないため、教職員間で幼児・児童の実態を理解し合えるような記録の取り方を考え、合同研修会に取り組むこととした。7月5歳児「セミの抜け殻に興味をもっている事例」は、各施設間で、虫に関する共通の経験があり、それぞれの姿を伝え合ったことから互いの育ちやつながりを知ることができた。

○2年目の取組

「園庭で見つけたカボチャの花から小学校との交流につながった事例」 5歳児

9月、幼児が、隣接の小学校に面したフェンスから伸びている蔓に、黄色の花が咲いているのを見つけたことから「何の花?」「これ、つながっている。」「どこから始まっているんやろう。」と好奇心をもちながら見たり、触ったりしていた。



<思考力の芽生え><自然との関わり・生命尊重>

「丸い実あった。」と見つけて「カボチャの絵本の絵と一緒にちがう?」「カボチャや。」と話す姿も見られた。小学校の校庭で運動会をするので、毎日、校庭に行っていたこともあり、子どもたちが「小学校にカボチャかどうか聞いてみよう。」と思いついた。その思いをクラスの友達に伝え、皆で小学校の先生に聞くことを話し合い、手紙を書いて聞きに行った。

<言葉による伝え合い><豊かな感性と表現><共同性><社会生活との関わり>

小学校の先生から「この葉っぱや花を見ると、カボチャであることは間違いありません。でも、今年はカボチャを育ててないので、前に植えたときの種が残っていたか、どこからか種が飛んできたのかもしれないですね。」と教えてもらい「やっぱりカボチャやった。」と喜んだり植えていないのに育ってくることに驚いたりした。



<思考力の芽生え><自然との関わり・生命尊重>

○小学校から伸びてきた植物から、子どもたちの好奇心・探究心が芽生え、「知りたい」という思いから主体的に問題解決しようとする姿勢につながった。また、より知りたいという思いから、積極的に「小学校に聞こう」と必要な情報を取り入れようとする姿が見られた。

「カルタ遊びを通して、様々なことに気付いたり、興味をもったりした事例」 5歳児

1月 保育室でカルタで遊んでいるときに、白紙のカルタが出てきた。「何も書いてないよ。」「自分で書くのかな。」と白紙のカルタに関心をもったことから、カルタ作りをすることにした。



「字は、丸の中に書いてるね。」「丸、切りにくいな。」「角を切ったら丸になるよ。」「この「を」は絵本に載ってたけど、難しい方の「を」って書くんだよ。」など、気付いたことを口々に話しながらカルタ作りをしていた。

<協同性><言葉による伝え合い><思考力の芽生え>

<数量や図形標識や文字などへの関心・感覚>

自分たちで作ったカルタで、ルールを決めながら繰り返し遊んでいた。



<道徳性・規範意識の芽生え>

○カルタで遊ぶ中で、カルタのいろいろな言葉の文字に触れ親しんだり、ルールを決めて守ったり、取れた枚数から数の多い、少ないに関心をもつなどの姿が見られた。

【成果と課題】

- 幼児が、「小学校からのカボチャ」や「カルタ遊び」に関心をもったことから、教師が一人ひとりの興味や発達に必要な体験を得られるような環境を用意し、必要な援助を行い、一緒に遊ぶ中で、学びの芽を感じたと捉えることができた。
- 今後も、教職員同士で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の視点で子どもの姿を読み取って共有することで、互いの教育の理解を深めていきたい。

(3) 幼保連携型認定こども園 和光園

【研究テーマ】

活動の中から、子どもの育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕から確認する。子どもが「どうなるんやろう?」「やってみたらこうなった!」などの知的好奇心や、気付きから試行錯誤の機会を多くもつことをねらいとした活動を設定し、子どもたちが興味を自ら掘り下げ、発展させる協同性の中に、子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の視点から読み取ることを目的とする。

【主な取組】

○1年目の取組

①色水遊び

赤・青・黄の3色の色水と様々な大きさのカップを用意した。最初は、それぞれの色をカップに入れてジュース遊びを楽しんでいたが、大きいカップに移し替えると2色が混ざり合い、緑や紫・オレンジに変化したことに気付いた。「見てー!〇〇色になった!」と驚きや気付きを共有していた。再び試してみるが思うようにならず、「さっきは赤と青で紫になったのに次は赤のままや…」「青が少なかったんちゃう?」「同じくらい入れたのになんで?」「ちょっとずつ増やしていく?」など、混ぜる色の量によって濃淡ができ上ることを知り、友達と協力し、意見を出し合うことでイメージした色を作ることを楽しんでいた。

②プログラミング

ロボットプログラミングで目的の場所までロボットを動かすプログラムを作成する体験をした。タブレットで数字を大きくすると前へ進み、小さくすると後ろへ下がる。速度も同様に変えることができ、自分の好みの方法で目的の場所を目指していた。最初は、数字の理解が難しく、「どこ押すん?」「合ってる?」と不安そうにする子どもや慎重に行う子どもの姿が見られた。自分で自由に触って体感するうちに数字の変化でロボットの動きが変わることに気付き、「さっきより速く(目的地まで)行けた。」「行き過ぎたけど、戻れた。」と最短ルートを基準に、友達と同じルートで同時にゴールして喜びを共感したり、自分だけのルートを発見し伝えたりするなど、試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいた。また、目的地を目指すには複数の方法があることを知り、個々の意見を受け入れ、認め合う姿が見られた。

2つの体験を通して、子どもたち自身が自ら気付いたこと、感じたことは自然と知識とし

て身につき、「次はどうなるんだろう？」と、より興味・関心が強くなっていくのだと感じた。

○2年目の取組

現実とファンタジーの世界の間の不思議さを体験～チョウチョからのプレゼント～

「和光園フェスティバル（アオムシの飼育活動の経験を生かしたグループでの探索活動）」

春、境内から伸びたミカンの木の葉に何かの卵が付いているのを発見した子どもたちは、飼育ケースで飼うことにした。卵からチョウチョになる瞬間までを見逃すことなく、大切に育ててきたチョウチョの旅立ちの時には、嬉しい気持ちで飛び跳ねたり、少し寂しい気持ちで涙を流したりしていた。生命の誕生と変態を身近に体験したことに、様々な気付きや発見、感情をもっていた。

この経験は、子どもたちにとって印象深いものになり、チョウチョに対してより親しみを持ち、園庭でチョウチョが飛ぶのを見つけると「(あの時のチョウチョが)遊びに来てくれたんや！」と信じて喜んだ。飼育したチョウチョへの、旅立ってから変わらない愛着を、会話や行動から感じ取ることができた。

そこで、保育者は、お別れした『チョウチョからのプレゼント』を立案して、子どもたちとファンタジーの世界を楽しめるように計画した。何者かより課されたミッションを通して、園内探索や謎解き・クッキングを体験する中で、グループで同じ活動に目的をもって、自分の意見を伝えたり、他児の意見を聞いたり取り入れたりする過程を経て、答えにたどりつくことを目的とした。その過程そのものが「協同」であり、ねらいの一つであった。

謎解きの発端となる差出人のないチョウチョからの手紙の中の『封筒を探すミッション』では、手紙を手がかりにしながら、「どんな封筒やろ？何色かな？」と意見を出し合った。見つけた封筒の中から何かの断面図や写真の分割パズルが出てくると、「こんな野菜、あった気がする！」「図鑑に載ってるかも。」と相談する姿が見られた。これまでの保育の中で扱ってきた「野菜」の知識をお互いに出し合って答えにたどりついた場面であった。



五感を使ったクッキングでは、実際に食材を手に取り、触ったり、匂いを嗅いだりして、「(道具の扱いを) こうやったら危くないな」「今日のポテトサラダは食べられた！」「めっちゃおいしい！」と言語化して、思いを共有した。また、自分たちで協力して作ったことで、苦手なものも意欲的に食べ、それをお互いに喜ぶことができた。

最後に、もう一度手紙を読み直すと、「ミカンの葉と一緒に入っていたからミカンに関係あるかも」「育ててくれてありがとう”って書いてあったし、チョウチョさんかな？」「チョウチョさんが重たいプレゼントどうやって運ぶん？」「プレゼントやからサンタさんが持って来たんやって！」とこれまでの経験や知識を生かして、想像力と思考力をフル回転させ、友達と問題解決の過程を楽しんだ。



なお、今回の取組では、安心感をもって就学できるように、3クラスある年長児を同就学先グループに分けて活動し、交流・親睦を深めることを2つめのねらいとした。

○小学校見学・校長先生へ質問

校長先生から「小学生が育てたヘチマとひょうたんをおすそ分けしますよ。」とお声かけいただき、小学校を見学することができた。初めて校内を見学する子どもたちは、「プールおっきいな!」「ここは何する部屋やろ?」と興味津々に覗き込み、兄姉のいる子どもは、「見たことあるから知ってる。」「お兄ちゃんが教えてくれた。」と自信満々に姿が見られた。

また、「給食食べられるかな?」「小学校でも遊べるのかな?」「テストって何するんやろ?出来るかな?」と校長先生に質問し、一つ一つ丁寧に答えていただいたことを喜んだ。帰園後は「小学校でも遊べるって言ってたな。」「(給食で)少なくしてほしいって、先生に言ったらいいんや。和光園といっしょやな。」「遊びも勉強って言ってた。勉強もなんか楽しそうやな。」と、子ども同士で話す姿が見られた。

以前より、兄姉やご家族、卒園児の話聞き、小学校に対して想像をふくらませ、あこがれをもって楽しみにする姿は見られたが、実際に自分の目で見て感じ、理解、納得をしたことで、より現実感や期待感も高まっていたように見える。

今回の取組の前提課題として、コロナ禍での子ども同士・教職員同士の交流の制限があった。そのため、各校園が知恵を絞って実地での交流がなくとも学び合える形を模索しながら取組を進めてきた。小学校が提案された未就学児に向けた小学校の紹介 DVD 作成のお話を伺った時に、その中で自分たちの出した疑問や質問が解決されていれば、より安心でき、見通しにつながるのではないかと考えた。さらに、保護者も交えた小学校進学への思いを交換する会で出てきた疑問や不安を、小学校見学の際にもって行くことができた。

子どもたちは生活や遊びの中から学ぶ。それは、保育者から「教えられる」のではなく、知的好奇心をくすぐる環境や、意欲的に関わる活動の中から、自ら学び取る。この小学校見学は、子どもの実際の経験が小学校への期待に直結する活動であり、教職員側の計画・連携が大きく影響する実践であった。

【成果と課題】

- 和光園フェスティバルでは、経験や知識を生かして、想像力と思考力をフル回転させ、友達と問題解決の過程を楽しんだ。その中に「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」〔10の姿〕を繰り返し確認することができた。
- 小学校見学の際には、校長先生に学校を案内していただいたり、質問に答えたりしていただいたことで、就学に向けての不安が解消し、期待をもつことができた。これは、校長先生の温かいお人柄がにじみでるようなお話をきいたことや、そのお話により「百聞は一見にしかず」を目の当たりにする結果であった。
- 地域の学校園の教職員同士が、お互いの保育・教育内容について議論、共有できたこと。また、地域で就学への連携・接続の共通の視点をもてたことが大きな成果であると考え。今後もこの関係性を基盤にして、連携・接続に取り組みたい。
- 鷺洲小学校下の人口増加により、コロナ禍後も従来通りの人的交流の難しさが予測される中、今回、Aグループ所属の校園の先生方や講師の横山先生が肯定的に捉えられる姿勢が、連携・接続の取組をより豊かなものにする感じた。
- 課題として、園ごとに就学に向けての体験が異なることを前提として、小学校に送り出す幼

保側の保育・教育内容を含めた教職員同士の情報共有と、学校への連絡が今後一層重要になる。
また、地域の特徴に合わせた連携を柔軟な視点で行っていく必要性を感じている。

(4) 幼保連携型認定こども園 第二和光園

【研究テーマ】

遊びを通して意欲的に活動する楽しさを味わう子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕から読み取る。

【主な取組】

○1年目の取組

日常の子どもの姿を記録にとり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の視点で育ちを読み取り、教職員間で共通理解し育ちを学び合った。

5歳児 10月（中当ての事例）

【本活動のねらい】

- ・ルールを守りながら取り組むと共に、友達と一緒に感じた事を伝え合い、自分たちでルールを考えながら進める。
- ・自分の目的をもち、身体を十分に動かしながらボール遊びの楽しさを味わう。

【本活動での教育的意図】

- ・より楽しく遊べるよう、それぞれの考えを出し合い、自分たちで遊びを進めていこうとする。
- ・遊びに必要なルールを守る大切さに気付くようにする。
- ・投げる・避ける・キャッチするなどの動きを楽しみ、戸外で遊ぶ楽しさや充実感を味わえるようにする。

- 中当てゲームを楽しむ。

＜健康な心と体＞

- ゲームを始めるにあたり、円の大きさや形などについて、子どもに問いかけ、大きさや図形への意識へとつなげる。

＜数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚＞

- 当てることがうまくできなかったなど、遊びの壁にぶつかった時には、気持ちを受容しながら、自分たちで考えて取り組み、工夫していけるように言葉がけを行う。

＜思考力の芽生え・言葉による伝え合い・協同性＞

- ゲームの中で出てくるトラブルなどから、相手の気持ちについて考え、ルールの再確認・共通理解、変更について話し合っていく。

＜思考力の芽生え・言葉による伝え合い・協同性＞

日々の子どもたちの活動を振り返るにあたり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕と子どもの姿を照らし合わせ、意識しながら取り組んでいく大切さを再認識した。

○2年目の取組

〈本活動のねらい〉

- ・自然の変化のおもしろさ・不思議さ・美しさに感動し、興味や関心をもって関わる。
- ・友達とイメージや意見を出し合い、つながりを深める。

<p>子どもの姿</p> <p>・以前、花見で春に訪れた広場に遊びに行く</p>	<p>幼児期の終わりまでに育てて欲しい姿〔10の姿〕</p>
<p>A児「前は桜が咲いていたけど、今は葉っぱだらけになってる」</p> <p>B児「見てー！ こんな葉っぱ見つけた」</p> <p>C児「こっちにいっぱいあるで」</p> <p>D児「先生、こんな形のがあっておもしろい！」</p> <p>E児「何かこれは色が半分ずつ違うで」</p> <p>T 「なんでかな。不思議だね」</p> <p>A児「きれい！ これ投げたら葉っぱの雨やな」</p> <p>B児「一緒にやろう」</p> <p>●A児が B児を待ちきれず飛ばす。</p> <p>B児「一緒にやろうって言うたやん！」</p> <p>A児「ごめん」</p> <p>B児「次はせーので（一緒に）やろう」</p> <p>●二人でタイミングを合わせて投げる。</p> <p>A・B児「めっちゃすごい！」</p> <p>●周りで見ていた子も寄ってくる。</p> <p>F児「いれて」</p> <p>A児「いいよ。みんなで投げたらもっとすごいことになるんじゃない？ だって100枚ぐらいあるんじゃない？」</p> <p>●多人数で繰り返し飛ばし遊ぶ。葉が広がって落ちている。</p> <p>T 「前に落ち葉のお掃除してはる人を見たことあるんだけど、みんなは見たことある？」</p> <p>N児「見たことある」「知ってる」「〇〇公園で見た」</p> <p>T 「きれいになった所見て、どんな気分やった？」</p> <p>M児「いい気持ち」「嬉しい気持ち」</p> <p>T 「じゃあ、今日はみんなで掃除屋さんになろうか」</p> <p>G児「うん」「やろう」「やろう」</p> <p>●園児同士で協力し、広場の落ち葉を集め、きれいにして帰園する。</p> <p>●翌日、持ち帰った落ち葉でオブジェを作る。</p> <p>T 「これつなげたら、素敵だね。ペンでもかけそうだね。何か作ってみようか？」</p> <p>A児「見て、なんか可愛い顔かけたで！」</p> <p>B児「つなげたらネックレスになった」</p> <p>C児「どうやったらつなげられるん？」</p> <p>B児「テープで貼るねん。でも、外れやすいけどな～」</p> <p>D児「後ろも貼ってみたらいいんちゃう？」</p> <p>B児「そうやな。たしかに！」</p> <p>C児「(落ち葉に) ペンで色塗ってみよう。」</p> <p>B児「黄色とかオレンジはあんまりつかんなあ」</p> <p>C児「(土台が) 白やったら見えるのにな」</p> <p>B児「濃い色やったらいけるんちゃう？」</p> <p>T 「なるほど。いい考えやね」</p> <p>C児「めっちゃよく見えるで～」</p> <p>F児「赤で描いたのに暗い色になってしまった…。まあ、いいか」</p> <p>G児「組み合わせたら鳥みたいになった」</p> <p>H児「鳥？ ふ～ん、なるほどね」</p> <p>B児「もっと落ち葉あったらいろいろ作れるな」</p> <p>A児「次は〇〇公園にしよう。どんぐりもあると思うで」</p> <p>*後日、袋に入れておいた落ち葉が温かくなっていたことに気づき、自然がもたらす力を感じていた。</p>	<p>・季節の変化に気付き、不思議さや尊さに気付く。</p> <p><自然との関わり、生命尊重></p> <p>・気付いたことを言葉で伝えたり相手の話を聞いたりして伝え合いを楽しむ。</p> <p><言葉による伝え合い></p> <p>・友達とのやり取りの中で自分の気持ちを調整したり、折り合いを付けたり、きまりを守ったりする必要性を感じる。</p> <p><道徳性・規範意識の芽生え></p> <p>・互いの思いや考えを共有して共通の目的の実現に向けて考えたり、工夫して協力したりして、充実感を味わう。</p> <p><協同性><数量への関心></p> <p>・相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつ。</p> <p><社会生活との関わり></p> <p>・その場をきれいにしようとする共通の目的の実現に向けてやり遂げる。 <協同性></p> <p>・情報を伝え合い、活用して役立てる。</p> <p><社会生活との関わり></p> <p>・友達の考えに触れる中で自分と異なる考えがあることに気付く。 <思考力の芽生え></p>



【考察】

身近な落ち葉に触れる中で形や色の違いに気付いたり、葉が風に流される様子を見て、風を目で見て感じたりして、自然の不思議さや関心が高まっていた。友達との関わりを通して、友達の考えや発想を共感したり、受け止めたり、折り合いをつける経験をしている。

【成果と課題】

- 身近な落ち葉に触れる中で形や色、量の違いに気付いたり、風を体で受けるだけでなく葉が風に流される様子を見て感じたりして、自然の不思議さに関心が高まっている。友達との関わりを通じて、友達の思いや考えに共感したり、折り合いをつけたりする経験をしている。皆で活動する楽しさを感じ、相手の意見に耳を傾け、自分の考えを伝えようとする姿は小学校就学後の「聞く」「話す」力の育成につながっていくと考える。
- 自然物への興味・関心を通じて友達と試し、自分できることに挑戦しようとする姿が自覚や自信となり、その後の小学校生活の中でも学びへの意欲や主体的に取り組もうとする姿につながっている。
- このような取組から、教職員は指導計画を立てる際に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕や、小学校教育とのつながりを意識するようになった。これからも子どもの興味や関心に応じた環境を整え、子どもの気付きや考えを受け止め、尊重しながら関わっていききたい。

3 Aブロックの研究のまとめ

【研究の成果】

- それぞれの校園での子どもの育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の視点で読み取ることで、互いの教育・保育内容の理解につながった。
- 各園校の具体的なエピソードを知ることで、保育や教育の内容を学び合い、自園の保育・教育の質の向上につなげることができた。
- コロナ禍においてもチャンスを逃さず機会をつくり、学習会を行ったことで教職員間の心の距離が近くなり施設訪問の実現となった。
- 小学校教育につながる学びの芽を一人ひとりの保育者が意識するとともに、施設内で共有することの大切さを感じた。
- 「できることからやってみる」という気持ちとフットワークの軽さが、保幼小の教職員同士の関係性を、身近なものにしてくれた。

【今後の課題】

- 地域の大規模団地や超高層マンションの建設による急激な人口増加に伴い、子どもの数も増え、小学校では学級数が増えてきている。このような状況の中、新型コロナウイルス感染症が収束しても交流の方法を工夫しながら、施設間の連携・接続を行っていく必要がある。
- 今後も、各施設の教職員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の視点に立った「連携・接続」の在り方や進め方を意識して継続し、深めていく。

(記録：Aブロック教職員)

①「架け橋プログラム」について

保幼小連携・接続について国が大きく動いており、幼児教育の専門家だけでなく、教育学、脳科学、国際理解教育、インクルーシブ教育等あらゆる分野の専門家が集まり、幼児期の教育と小学校の教育をつないでいく取組が進んでいる。決して小学校教育を先取りして幼児期に行うわけではなく、非認知能力である好奇心・粘り強さ・自己調整・協同性などや、数や文字への関心、生活習慣など、学びの基盤を育てていくためのプログラムである。各園所の環境や地域性に応じて創意工夫し、再来年度には各園所が「架け橋プログラム」をつくっていく方向で検討されている。各園所や地域で関係者が連携し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]というキーワードをもとに、保幼小の教職員同士が繋がり合い、地域の幼児教育と小学校教育がつながるカリキュラム作成を進めていってほしい。

②「幼児期の終わりまでに育ってほしい」[10の姿]を視点にした連携・接続

コロナ禍ではあるが、連携・接続の歩みを止めずに、今できることの工夫を凝らしてAブロックは行っていた。[10の姿]を共通の視点として、実践事例をまずは各園所、小学校内で読み取り、それを持ち寄って共有することで、自分たちの特色や強み、いろいろな読み取り方が分かったのではないかと。「コロナ禍だからできない。」ではなく、自分たちができるところから取り組んでいく姿勢が、教育・保育の質を高め、連携・接続を豊かにしてくれる。

Aブロックの連携・接続の特色が4点あった。

1点目は、学校園所の特色、強みを知るという点。Aブロックの学校園所は小学校を中心に歩いて行ける距離にあるため、教職員同士の対面が可能だった。

2点目は、教育の質の向上を振り返り、そこから連携・接続を進めていた点。学校園所の教育を見直すことで、日常の子どもたちの姿から生まれる教育・保育の実践を行っていた。また、その実践記録を各学校園所が持ち寄り、共有できたことが大切になる。

3点目は、チャンスを逃さずに交流を行った点。例えば、カボチャの蔓を見つけるという偶然から生まれた子どもの姿を小学校への連携に進めていった。また、コロナ禍で交流の計画が立てられない中で、ぱっと動けるフットワークの軽さやスピード感があった。子どもの姿を通して、できるところから交流を始めていた。

4点目は、交流という捉え方が多様な点。1点目の特色である、学校園所が近隣にあるため、対面での学習会や公開保育を開くことができた。強みを活かして交流を考えてできるところを行っていくことが大切。子ども同士・先生同士・保護者同士の3つの交流がよく言われるが、子どもと先生・学校園所内での交流もある。また、修了児や兄弟など知っている、信頼のある人から直接話を聞くことも交流の一つになる。同じ小学校に入学する子ども同士、その保護者同士の交流など、いろいろな形もある。自分たちの環境で何ができるか、形に縛られないで交流を行っていただきたい。

最後に、何のために保幼小連携・接続があるのか。それは、もちろん子どもの幸せのためである。今後も子どもの心の育ちを大切に、目の前にいる子どもたちのことをよく知る先生方が連携・接続の取組の継続を行っていただきたいと思う。

5 参加者のアンケートから

- ・発表の中で、隣接する学校から伸びてきた蔓に咲いた花を見て、不思議に思った子どもたちの姿を捉え、小学校とつなげる保育をし、校長先生から誘いを受け、すぐ行動に移して小学校に遊びに行くなど、考えているだけではなく、行動することの大切さを学んだ。また、子どもたちの思いや姿を大切にして、その瞬間を逃さず捉えていくことも必要だと感じた。
- ・何ができないではなく、何ができるのかと前向きな姿勢で取り組んでいたと横山先生が話されていたが、本当にブロックの先生方の姿勢に学ぶところが多かった。コロナ禍でも、できることに目を向けているつもりだったが、保幼小の連携について、もっとできることはないかを探していきたいと思う。
- ・子どもの気付きや発見をいかに保育に取り入れるかが大切だと思った。子どもが偶然気付いたことに共感するだけでなく、「なぜ?」「どうなっているのだろうか?」という思いを行動につなげられるように環境を整えたり、小学校と連携したりすることで、気付きを深め、関わりを広げることができるのだと感じた。子どもの発言や思いを細かく振り返り、その機会を逃さないようにしていきたいと思った。
- ・コロナ禍で直接交流が難しい中、2年かけて子どもの育ちやつながりを知らせ合うことから理解を深め、様々な方法で、その時できる形と内容で交流をしていることが分かった。地域の特色からフットワーク軽く交流を検討して、これからの参考にしていきたいと思った。
- ・コロナ禍で連携・接続の困難さがある中、考えと意思を出し合い、進めてきた力を感じた。様々な教育が集まり、考えが重なり合うようになる過程で学んだことは大きいと思った。横山先生の指導講評での「チャンスを活かす」、「多様な交流」などの捉え方は、実践を考える時のキーワードにしようと思った。

6 進学

幼保連携型認定こども園 和光園

小学校について子どもたちが気になっていた事を質問すると、校長先生が詳しく教えてくれました。



鷺洲小学校に行きました

さくらぐみ・うめぐみ・ひまわりぐみ
R3.12.27

鷺洲小学校の校長先生から、「小学生がへちまとひょうたんを育てたので、おすそ分けしますよ。」とお招きいただき、皆で小学校におじゃまさせていただきました。



校長先生、おはようございます！



これが、へちまか〜ひょうたんはテレビで見ただけある！



ろくほくって遊具…通り抜けてみよう



これがアール



ここは、図書室。



この池では、亀と鯉を飼っています。一匹だけ、金色の鯉がいるらしい。どこかな？



ひょう〜い！

ここが、体育館。年長さんたちは、今度、入学式がありますね。こういう所です。運動もできます。

Q1. 小学校でも遊べますか？

A1. 休み時間は遊べます。勉強の時間は勉強をします。運動場でも遊べますし、教室でも暴れなければ遊べますよ。砂場もありますか？

A2. 砂場があります。猫がおしっこをしないよう今はシートをかけていますか遊べます。

Q3. 給食は多いですか？

A3. 給食室では毎日だいたい800人分の給食を作っています。給食の量は、昔の年や体重を計算して一人分の量が決まっています。でも、少なくなったり、もっと食べたい時があるよね？担任の先生が調節してくれます。

Q4. 本はどれくらいありますか？

A4. 図書室の本はだいたい3000冊くらいあります。

Q5. 朝、起きれるか心配です。

A5. 昔、朝起きて今日ここに来ているので大丈夫です。遅れても大丈夫です。

Q6. 遅刻したらどうしよう。

A6. 遅刻しても大丈夫です。でも、できるだけ遅刻しないようにね。

Q7. 家が遠いけど、一瞬に行くお友だちはいるかな？

A7. 集団登校で家が近くの人と1年生から6年生まで班になって一緒に学校へ行くことになりました。ひとりぼっちはありません。

Q8. 学校のテストが心配です。

A8. 勉強して習ったところしか出ませんから、大丈夫です。

Q9. 図工って何をしますか？

A9. 物を作ったり絵を描いたりする勉強です。学校でする勉強は、国語や算数、給食も遊び方も何をやるのも全部が勉強です。

もうすぐ進学する年長さんも、ちよつと先に進学する年中さんも、小学校に行くのが楽しみになってきたそうですよ。

小学校生活の様子の DVD を作成し、就学前施設に配付した。〔大阪市立鷺洲小学校〕

